

(6) 茶

○ 茶

【一般事項】

(予防に関する措置)

- ・ハマキムシ類やハダニ等の害虫への対策として、飛来及び増殖源となる園地内及びその周辺の雑草及び樹木を除去する。
- ・炭疽病、もち病等の病害への対策として、園内に日陰が生じないように、周辺の樹木の伐採及び枝管理を適切に行う。
- ・定植時及び幼木期には、各種資材、敷草等による畝間等のマルチングや機械除草により、適切な雑草の管理に努める。

(判断、防除に関する措置)

- ・園内の病虫害及び土着天敵の発生状況及び生態を観察し、防除の要否及び薬剤の選択の参考とする。
- ・性フェロモン剤及び微生物農薬を活用する。
- ・薬剤感受性の低下を防ぐため、異なる系統の薬剤を用いたローテーション散布を実施する。

<p>ちや</p>	<p>アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 寄主植物が多く、雑草などで増殖するため、園内やその周辺の下草及び雑草の管理を行う。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 園内の見回り等に基づき、適期に防除する。たたき落とし法(B 5 版)で 10 回たたき 10 頭以上の場合はずぐに薬剤散布を実施する。 ・ 防除時期は、6 月上中旬(二番茶芽開葉期)、7 月中下旬(三番茶芽開葉期～生育期)、9 月上中旬(秋芽開葉期、散布)である。 ・ 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
	<p>カイガラムシ類 (クワシロカイガラムシ)</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 苗を導入する際には、本種の寄生の有無を確認し、寄生苗を持ち込まないようにする。 ・ 苗の生産を行う場合には、採穂園の防除を徹底するとともに、薬剤による挿し穂の浸漬処理を行う。 ・ 苗は防虫ネットで被覆した施設において、無かん水挿し木法等により苗の育苗を行い、定期的な薬剤散布を実施する。また出荷する際は箱に密閉して行う。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 園内の見回り等に基づき、防除適期である幼虫のふ化盛期の把握に努める。 ・ 幼虫発生盛期は、第 1 世代が 5 月中下旬、第 2 世代が 7 月中下旬、第 3 世代が 9 月中下旬であり、防除はこの時期を狙って行う。 ・ 薬剤散布は幼虫ふ化期(白いロウ物質が爪で簡単にはがれる頃を目安)に行い、薬液が茶株内の枝幹に十分にかかるように散布する。 ・ 本種のふ化が始まる頃からスプリンクラーや散水チューブ(地上 30cm 程度)で散水すると薬剤処理とほぼ同等の防除効果が得られるが、水処理で効果を得るためには、十分な水量の確保(10a あたり一日 12~15 t)が必要である。また、散水による湿害が懸念される茶園では排水対策を実施する。 ・ 土着天敵への影響が小さな薬剤や散布法を選択し、天敵を保護する。

<p>ちや</p>	<p>チャトゲコナジラミ</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中切りや深刈り、すそ刈り等で寄生葉を除去し、土中に埋める。 ・拡散防止のため、発生ほ場に立ち入った後は必ず成虫の付着が無いことを確認し、付着していた場合は確実に払い落とす。 ・発生地域では未発生地域への苗の移動に十分留意する。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤散布は1～2歳の若齢幼虫期で効果が高い。防除適期の目安は成虫の発生が終息した頃である。防除は6月初旬、8月上旬、9月下旬、11月下旬を目安に行う。 ・冬期に、気門封鎖剤を必要に応じて複数回散布を実施する（冬期の散布は赤焼病の発生を助長することがあるで注意する）。 ・茶樹のすそ部の葉裏に寄生が多いため、薬剤散布を実施する際には薬液をかかりやすくするため、散布前にすそ刈りをするか、すそ重点で散布すると効果的である。 ・土着天敵（寄生蜂シルベストリコバチや捕食性のクサカゲロウなど）への影響の少ない選択的薬剤を選び、天敵を保護する。
	<p>チャノホソガ</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被害葉が見られ始めたら早めに摘採し、幼虫の除去に努める。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内の見回り等に基づき、適期に防除する。 ・防除時期は、4月下旬～5月上旬(一番茶芽生育期)、6月上中旬(二番茶芽生育期)、7月中下旬(三番茶芽開葉期～生育期)、9月上中旬(秋芽開葉期、散布)である。幼虫は葉裏に潜行するため薬液が十分にかかるように散布する。 ・一番茶期で摘採が遅れる園や玉露などの覆下茶園では防除を徹底する。 ・秋の防除を徹底し、一番茶期の防除はできるだけ回避することが望ましい。 ・薬剤散布の時期が新葉展開期に当たるため、残臭期間に注意し、使用薬剤を選定する。 ・微生物農薬を活用する。

ちや	<p>チャノミドリヒメヨコバイ</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・摘採間近になって幼虫の発生が増加してきた場合は早めに摘採する。 ・摘採後の裾葉に残る遅れ芽などは成虫の産卵場所になるため、早めに裾刈りを行う。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生予察情報や圃場内の見回り等に基づき、適期に防除する。たたき落とし法(B 5 版)で 10 回たたき、4 頭以上の場合は薬剤散布を実施する。 ・本種は一番茶摘採後から 10 月中旬ごろまで間断なく発生するため、各茶期の摘採後に防除する。特に二・三番茶期から秋にかけての発生が多いため、この時期の開葉期を重点的に防除する。 ・抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤の連用を避ける。 ・有力な天敵であるクモ類を保護する。
----	--

<p>ち や</p>	<p>ハダニ類</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・凍霜害後に多発するため、凍霜害による被害防止に努める。 ・新芽に発生が見られたら早めに摘採する。 ・園内や周辺の雑草は増殖の場となるため除草を徹底する。 ・干ばつ条件下で多発しやすいため、可能な場合はかん水を行う。 ・多肥にすると発生が多くなる傾向があるため、施肥基準に従って、適正な施肥量とする。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内の見回り等に基づき、発生初期の低密度期に十分量の薬剤散布を実施する。 ・防除の目安は、生育密度が1葉当たり平均0.1頭(卵・幼若虫・成虫の合計)以上(または寄生葉率2%以上)の場合であるが、3月は基本防除とする。 ・防除は2月下旬～3月中旬の産卵開始期および11月～12月中旬の越冬ダニ防除に重点をおき、新芽の生育中はなるべくさける。多発園では一番茶摘採後や秋芽生育期にも防除する。 ・殺ダニ剤の多くは浸透移行性に乏しいため、薬剤が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。 ・本種は薬剤抵抗性の発達が早いため、同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を実施する。 ・土着天敵のカブリダニを保護する。
----------------	---

<p>ち や</p>	<p>ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）</p> <p>（予防に関する措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三番茶不摘採園では発生が多くなるため、整枝、せん枝を行うことで幼虫等の密度を下げる。 <p>（判断、防除に関する措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内の見回り等に基づき、適期に防除する。 ・防除は、第1世代発生期の6月中下旬及び第2世代発生期の7月下旬～8月上旬の園内の成虫に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に薬剤散布を実施する。巻葉後の防除効果は劣るため、巻葉が見られたら直ちに薬剤散布を実施する。 ・抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
	<p>新梢枯死症</p> <p>（予防に関する措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素肥料の過剰施用を避け、適正な施肥を行う。 ・通風、日当たりを良くする。 ・発病園と未発病園で使用する摘採機及び生葉袋を区別する。 ・発病園で使用した摘採機や生葉袋はよく水で洗浄する。 ・被害葉及び被害枝条を除去する <p>（判断、防除に関する措置）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整枝、せん定により発病部位を除去し、通風や日当たりを良好にする。 ・園地の見回り等に基づき、適期に防除する。 ・防除時期は、平坦地の煎茶では、三番茶摘採後または刈り落とし当日頃（7月下旬頃）、秋芽萌芽期（8月上旬）、秋芽1～3葉期（8月下旬）である。また、山間地の煎茶では刈り落とし当日頃（7月上旬頃）、秋芽1葉期（7月下旬～8月上旬）である。

<p>ち や</p>	<p>炭疽病</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素肥料の過剰施用を避け、適正な施肥を行う。 ・通風、日当たりを良くする。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整枝、せん定により発病部位を除去し、通風や日当たりを良好にする。 ・園地の見回り等に基づき、適期に薬剤散布を実施する。 ・煎茶園では二番茶の1葉期と、秋芽生育期の萌芽～1葉期と4～5葉期に薬剤散布を実施する。 ・玉露園では、剪枝後1葉期頃から7～10日おきに2～3回薬剤散布を実施する。 ・薬剤散布は、降雨前の方が防除効果は大きい。一方、薬剤散布後に降雨があった場合、薬液が乾いていれば（目安は散布から約2時間）、再散布の必要はない。 <p>※用語整理</p> <p>整枝：摘採面を整えるための作業</p> <p>剪枝：老化枝条更新のための作業</p> <p>枝条：枝ではなく、茎と葉の総称</p>
	<p>もち病</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素肥料の過剰施用を避け、適正な施肥を行う。 ・通風、日当たりを良くする。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整枝、せん定により発病部位を除去し、通風や日当たりを良好にする。 ・園内の見回り等に基づき、適期に薬剤散布を実施する。 ・防除時期は、二番茶の萌芽前及び9月上中旬の秋芽生育期である。 ・多発園では秋整枝後から一番茶の萌芽期前に越冬芽の防除を行う。 ・銅水和剤による二番茶萌芽前の1回散布は、二番茶期の本病に対して高い効果を示すが、注意点として、本剤による防除適期が短いことから、散布時期を逸しないようにし、薬液が十分かかるように散布する。 ・輸出茶用栽培で本病を対象に銅水和剤を用いる場合は、輸出相手国の現行の残留農薬基準値に十分留意する。

ちや	<p>輪斑病</p> <p>(予防に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素肥料の過剰施用を避け、適正な施肥を行う。 ・通風、日当たりを良くする。 ・発病園と未発病園で使用する摘採機及び生葉袋を区別する。 ・発病園で使用した摘採機や生葉袋はよく水で洗浄する。 ・発病葉及び発病枝条を除去する。 <p>(判断、防除に関する措置)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整枝、せん定により発病部位を除去し、通風や日当たりを良好にする。 ・園内の見回り等に基づき、適期に薬剤散布を実施する。 ・防除時期は、平坦地の煎茶では、三番茶摘採後または刈り落とし当日頃（7月下旬頃）、秋芽萌芽期（8月上旬）、秋芽1～3葉期（8月下旬）である。また、山間地の煎茶では刈り落とし当日頃（7月上旬頃）、秋芽1葉期（7月下旬～8月上旬）である。
----	--